



【よみがえられたイエスキリストを信じますか。】

今日の聖書本文:ヨハネの福音書20章24-31節/暗唱聖句;ペテロの手紙第一1章3節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！今週主の受難週間を敬虔に過ごせましたか。今日はイエス様の復活を記念し、感謝をささげるイースター礼拝として捧げています。十字架の死からよみがえられ、天にのぼって今日も我々ためにとりなしてくださるインマヌエルの主イエスキリストの恵みと勝利がクリスチャンプレイズチャーチの教会の家族の上に豊かに豊かに満ち溢れますよう切にお祈り申し上げます。

今日我々は先端科学、医療時代に生きています。多くの方々の研究や開発によって人の健康と命、そして環境の全般に素晴らしい結果と良い影響をたくさん受けています。そのためある方は科学的や医療的のみを信用し、それだけを信じようとする事もよく周囲に見られます。2年前でしょうか。日本では山中教授のノーベル賞受賞で大きな話題となったiPS細胞とその能力をはるかに上回る可能性がある女性の研究者が万能細胞「STAP細胞(正式名称は「刺激惹起性多能性(しげきじゃっきせい)獲得細胞」といいますが、刺激(ストレス)を与えることによって、多くの細胞に変化できる「分化多能性」を持った細胞。「惹起(じゃっき)」とは、何かを引き起こされることで、この場合、刺激で多能性の獲得が起きる、という意味で英語表記した際(Stimulus Triggered Acquisition of Pluripotency)の頭文字からとったもの」という物を発見し、出した論文は日本、世界で注目されてましたが、結果的にそれが偽造のからくりがばれる大騒ぎになった事件があります。数年前アメリカでもある団体で人を複製(ふくせい)することができたと発表され大イッシュになったことがあります。今まで、人間の命とはただ神の領域内にあると信じて来たからです。しかし、彼らは人も複製できると主張しました。しかし、人間は肉体と魂になっているため、どんなに遺伝工学(いでんこうがく)を利用して人を同じく作ることが出来たとしても人の魂を人が造る事ができないことを覚えなければなりません。ところが、いくら先端科学が発達していても同時に人間はまだ全てを知る事が出来ないし、限界ある事も明らかにあり、それもいつも謙虚に認めなければならないのではないでしょうか。(例え、神によって造られた人体の神秘:自動車部品1万3千個・747ゼット乗客機:3百万個。宇宙船5百万部品要・人間は体内細胞数:100兆・25兆赤血球(せっけつきゅう)・250億の白血球・脳神経細胞:1000億・人間の血管12万Km:地球3回巻ける・心臓白数:一生平均2億8千回)

人間の命や健康のための複製しようとしている益々先端科学の時代にわれらは住んでいても、人が死んだら、どうなるのかは今だ明確に説明ができてない状態です。大多数の人々は人は死んだらそれでおしまします。なぜなら、人が死んだら、肉体は腐敗してなくなり、それで人ももうそれで終わりだと思っただけです。しかし、人々が見逃していることがあります。人間はただ、くさくなってなくなる肉体だけの存在だけではないとことです。肉体がなくなった後、魂がどうなるのかに関心を持たなければなりません。人々は死を恐れて宗教をつくり、一人に取り残されるのを恐れて社会を作り上げました。人々は色んな宗教を作ってきました。ある人々は釈迦(しゃか)が作った仏教の影響によって人は輪廻(りんね)するのだと信じています。前生(ぜんしょう)に動物だったかも知れないし、今回死んだら、またほかある存在として生まれるのだと言います。東洋(とうよう)思想にはまっている人々は死んだ人の魂が愛する人を離れず、周りを歩き回っているという考えもあります。人生観を丸で見えています。しかし、キリスト教は直線の人生観(一度の生まれ-死-永遠にまで)を教えて下さっています。

我々が信じているキリスト教の信仰の一番の違いは何でしょうか。一つ目はキリスト教は人が作り上げたいろんな宗教の一つではないことです。正確に言うと、キリスト教はある創始者の人によって出来上がった宗教ではなく、神様からの人類の救いと愛と平和のために与えられた道であり、信仰であります。聖書も神が我々に与えて下さった神の御言葉であるでしょう。そして、もう一つの大きい違いは人間的にすばらしく、尊敬された仏教の釈迦とかイスラム教のマホメットのように方々はすでにインドやメカに行くと彼らの遺体が置かれているお墓がありますが、イエスのお墓だけは今もなお空っぽのおほかであるということです。つまり、すべての人は死にましたが、ただイエスキリストのみが死を打ち勝ち、聖書の通り三日目に復活されたので、イエスのお墓は今日も空いているわけです。キリスト教の信仰だけが唯一人間の死の恐れと暗闇の力を打ち破る創造主神からの唯一救いの道である事をイエスキリストが行われたのです。聖書は明確に、そして、詳しくイエスの十字架の事件とイエスの復活が事実であることを証明しています。

“そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。”(コリント人への手紙第一15章17-20節)

“私たちの主イエスキリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。”(ペテロの手紙第一1章3節)

今日の全てのキリスト教会ではこの復活の日をクリスマスと等しく大切に記念しています。イエス様の誕生と十字架と復活の出来事はイエス様が真の神様であり、人類の救い主であることを証しする確かなことだからです。今日になって来てはこの世と教会が商売にあわせられてクリスマスをもっと盛大にやっていますが、実際に初代教会の時代を調べると、クリスマスよりも、イエス様の復活がもっと大事に覚えられ、そのメッセージが毎週、語られ、大胆にイエスの復活の知らせを伝えるのに力を入れるほど、イエス様の復活は毎週教会の核心となっていました。当時イエス様が十字架にかかれた金曜日から三日目が安息日(土曜日)の翌日(今日日曜日)に復活されたので、初代教会の聖徒たちはイエス様の復活を記念して日曜日に集まって礼拝を捧げ始めたのが、今日教会の日曜礼拝のもとなのです。ですから私たちも、この復活の日を年一回だけ特別な行事ぐらいに考えないで、毎週日曜日に、礼拝を通してイエス様の復活を覚え、今も生きておられ、我々と共におられるインマヌエル主を心から信じ、ほめたたえ、祈るべきであります。有名な神学者であり、牧師であるジョシュマクドエル先生はこの事実についてこう語りました。

“日曜日は歴史的な事実を記念するが、1年に52回記念する有一の日なのだ。その歴史的な事実とはイエスキリストの復活の出来事を意味するのである。”

1.<イエス様の復活が信じられなかった弟子トマス>

今日の本文はイエス様の弟子の一人であるトマスがイエス様の復活を信じずにいましたが、結局最後に復活された主に出会ってからようやくイエスキリストの復活を心から信じ「私の主、私の神」と告白する内容です。そういうわけで人々は「疑い深いトマス」と言われて来てますが、実際トマスのあだ名は「デドモ」でした。この意味は「双子」という意味です。最近では双子がめずらしくないですが、むかしはまれだったようです。おそらく一卵性の双子だったのではないかと思います。彼は誰よりもイエスキリストの弟子として従っていながらも現実主義者でした。トマスは目に見えたとしても自分の手で触って確認できなければなかなか信じようもしない人でした。そういうわけで彼は結局イエス様の弟子たちの中で一番最後にイエス様の復活を信じるようになりました。今日の本文の箇所はヨハネの福音書の結論です。使徒ヨハネがこの偉大な福音書の結論をトマスの話でまとめている事はとても意味深い事で、弟子であるトマスがイエス様の復活をずっと疑いながら、最後に復活された主に出会ってその疑いが変わって甦られたイエスキリストまでも信じ、真の神の御子、救い主として信じた過程は我々にとっても大切な意味を教えて下さっています。

今日のヨハネの福音書20章19節から見ると、最初弟子たちはイエス様の復活をだれも信じなかった。しかし、安息日がすぎた日曜日の夜、彼らがみな集った時、そこに復活されたイエス様が現れました。そこにいた弟子たちはイエス様に拝見してからイエス様が十字架に掛かれる前おっしゃった通り三日後によみがえられた事を信じるようになりました(20節)。しかし、そこにイエス様の弟子一人が抜けていました。その弟子が今日の本文に出ているトマスでした。トマスは弟子たちに現れたイエス様の証言を聞いても信じられませんでした(24-25節)。

まず、弟子たちがみな集った時、トマスがそこにいなかった事に注目して見る必要があります。主の十字架の前では希望を失い、怖くて散らされた弟子たちがなぜみな集まったのでしょうか。その理由は主のお墓から起きたおどろく出来事を聞いたからです。ペテロとヨハネはイエス様のお墓が空っぽになっていたことを確認したと言われます。その後、マグダラマリヤはそのお墓の前でよみがえられたイエス様に出会ったと証言しました(ヨハネ20:11-18)。これは弟子たちにはとても大きな出来事であって、この事実をもっとくわしく確認するためにそれぞれ隠れていたところに連絡し合っただけです。しかし、そこにトマスは見えなかったのです。トマスがそこにいなかったことに対して、単純に彼に連絡が届かなかったと考えられませんが、トマスが復活された主に出会った弟子たちに言った言葉や、主に言った言葉などを考えて見る時、**実はトマスは弟子たちの話でさえ信じなかったからです。**トマスはきっと「イエス様が生前そうおっしゃったけど、復活して決してそんな事は現実的にありえん！」と思っただけからではないでしょうか。これほどトマスは信仰より現実的な人だったのです。しかし、イエス様はすでにご自身によみがえらせる神の力と権威を持っておられる事をすでにトマスに見せて下さった事がありました。

イエス様が病で亡くなったラザロの伝言が届いた時、なくなって数日が経っていた彼を生き返らせて下さいました。その奇跡を起こして下さる前、トマスも登場します。イエス様はラザロがなくなって彼がいたユダヤというところに行かれないとすると、イエス様を止めようとしていました。もうすでにラザロがなくなって4日間も経っているのに、イエス様が行かれてももう意味がないし、イエス様をいやがるユダヤ人たちが多からしめて害を受けるかも知れないと思ったトマスは、「**我々も行って、主といっしょに死のうではないか。**」(ヨハネ11:16)と言います。ここでトマスは表はイエス様従える弟子という立場でしたが、**まだ信仰はなく相変わらず非常に現実ということだけしか大事に思わなかった人である事が分かります。**現実的にユダヤはとんでも危険なところであって、トマス自身は本当に行きたくありませんでした。ユダに行くことは死ぬために入るのと一緒だと現実的に判断したのです。しかし、それにもかかわらずイエス様がユダヤに行かれた時、トマスはイエス様を離れませんでした。これがトマスがイエス様の弟子になれた特徴でもあります。彼はとんでも現実的であっても、尊敬し、愛していたイエス様が行かれるなら、ついて行きました。**イエス様の弟子であるトマスはイエス様を愛し、主から離れることを望みませんでした。反面、現実的であって、自分の考えから外れた事に対しては受け入れがたい性格をもっていたことが分かります。**彼はすべてのことを確認し、検証したゆえに信じて従う、ととても合理的な人であったと言えると思います。

<2. イエス様の復活を信じられない理由>

トマスを通してイエス様の復活を信じられなかった理由が何であるかを考えることができます。

一つ目は現実だけが全てだと思っただけでトマスは超自然的な世界に対する思いや信仰が全然ないため復活を信じない場合です。一週間の間、ずっと考えている事がお金を稼ぐこととか、この世のものや人々の態度に関する事などばかりなら、ある日、突然、主の復活に対する話を聞いた時、とんでもない話をするなど反応するしかないと思います。**なぜなら、その人の頭には死んだ人の復活についてあらかじめ、入力されているソースがまったくないからです。**死について考えたことがない人に復活についての話が耳に入るわけがありません。周りに実際愛する人が死を迎えたとか、近くの人が急に召される衝撃を受けてから人はようやく人間の死について深刻になり、ようやくその後の復活と永遠の死に対する話を聞き入れるようになるでしょう。ですから、その前は死と復活を自分とは関係ない遠い話として扱ってしまうのです。**一方、弟子トマスは自分の頑な考えと基準があまりにも堅くて、強いため、受け入れられない場合もあります。特に自分の思考がいつも正しくて、論理的で、合理的な考え方が思っただけで自分の論理と思いをやぶろうともしません。**たとえば、ある人は思考の中心が自分にあります。要するに自己中心的です。すべてを自己中心に考えます。その人は職場においても自分のやり方を通します。なにか悪い思いがあるからではありません。ただ、すべてのことを自己中心に考えるからです。ほかの人が自分の考えと違った行動を取ると裏切られたと感じ、心のかべを作ってしまう。その人はだれがどんな話しをしても自分の考えと違っていると受け入れません。ある人々はまるで、自分の世界に閉じ込められている王のようです。これを心理学的にナルシズム(narcissism)と言います。自分の中に、ある世界を作って置いてその中で君臨(くんりん)し、その中ですべてを考えます。ところが、ある新しい事実や情報が聞こえられると、自分だけの世界を破りたくたいため、それが事実であろうとなかろうと拒否してしまいます。

今日の聖書の本文ではほかの弟子たちが復活されたイエス様に出会ったと言った時、トマスは何と言いますか。

“私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れて見なければ、決して信じません。”(25節)今他の弟子たちが甦られたイエス様に出会ったという言葉はトマスは自分の常識をはるかに超える話なので、それが事実であろうとそうでないであろうと信じまいということです。それとも自分は現実に自分が見ても、触ってもないので、とんでもない話であると扱っているのではないのでしょうか。その理由は何ですか。トマスの心はすでに主の死について自分の思いと整理がもうついたからです。‘主はすでに死なれた。もうイエス様とはすべてが十字架の上で終わった。そして、いま私とは関係がない。’トマスは今変化を拒否しています。自分の世界を破ってそれより大きい事実を受け入れまいと拒んでいるのです。彼は続けて自分だけの世界にとどまりたがっていました。もし、彼のこのような態度のため、イエス様が再び会って下さらなかつたなら、彼はどうなったのでしょうか。おそらくトマスはひどいナルシズムの被害者となっていたかも知れません。今日私たちにもある程度トマスのような傾向はないでしょうか。

愛するみなさん! 神様の御言葉を聞く前にまず自分をかえりみる事がどれほど大切なのか分かりません。自分の心に神様の御言葉が入れる空間がなければなりません。ある自分の思いに満ちている人にどんなに熱心に説明しても入るわけがないからです。今トマスは二つのすべてに当てはまります。彼の頭にはイエス様の死と復活が入力されていませんでした。ただ、彼には肉体のイエス様だけが意味がありました。死なれたイエス様については全然入力されていませんでした。イエス様が十字架にかかって死なれると何度も言われても彼は認めたくなかつたかも知れません。その理由はトマス自身がそれを望まなかつたからです。結果トマスの強い思いは彼をイエス様の復活を信じる事を一番遅らせたのです。

<3. 期待に満ちた主日の夜>

もう一度本文に戻ってみましょう。イエス様に出会ってから一週間の間、弟子たちに復活されたイエス様はまた現れませんでした。イエス様に出会ってから八日に経ってユダヤ人たちの祭りは終わりました。すべてのユダヤ人たちはそれぞれ自分たちの故郷に戻ります。なのに今日の本文を読むと、弟子たちはふたたび集まりました(26節)。

なぜなら、‘もしかすると復活されたイエス様が今日も我々に会いに来てくださるかも知れない。’という期待が弟子たちにはあつたようです。今回はトマスも一緒です。きっとトマスの強い疑いにもかかわらず他の弟子たちが強くすすめたのではと思われれます。

もうみなイエスの復活を信じていたの弟子たちはトマスを今回こそ一人にさせませんでした。ほかの弟子たちには一つ強い期待と望みがありました。“主よ。先日は我々に来てくださいました。しかし、その時一人トマスが抜けていました。主よ。まだトマスは主の復活を信じていません。我々の力では何もできません。主が再び来られ彼のすべての疑いを取り除き、彼にも我々のように復活の主を再び迎え入れ、信じられる信仰を与えてください。”そして主はその望み通りに彼らにたずねて来てくださいました(26節)。復活されたイエス様は以前と同じく来てくださいます。そして、不安と緊張と疑いの中にいる弟子たちにまず“平安があなたがたにあるように”と平安をしてくださいます。ここで甦られたイエス様に出会う時、現される一番確実な現状は、我々の中にある葛藤と疑いと不安が消え去り、心は神の平安で満たされるということです。

そして、今日の弟子たちから学ばされるもう一つがあります。それは、イエス様の復活を信じているほかの弟子たちは疑っているトマスを非難しなかつたことです。彼をむりやり説得させようとしませんでした。彼らがやったことは一週間を待つて再び集ったことです。よみがえられたイエスキリストに導き、出会うだけでした。ほかの弟子たちはイエス様の復活を信じないトマスを一人に取り残しませんでした。みなさんはイエス様の十字架と復活を信じますか。まだこの事実を信じないで、いや信じられないでいる人々もいます。私たちも弟子たちのようにイエス様が直接出会ってくださって彼らの不信を取り除いて、疑いや自分の思いに満たされている物に信仰の確信をくださるよう助け、その機会を作ってあげながら、忍耐を待たなければなりません。

復活されたイエス様がトマスに現れて言われた言葉は何ですか。(27-28節)

25節で、トマスが言った通りにイエス様は言われます。まるで主がトマスのそばにいて彼が言った言葉や心の思いを全部聞いて読んだいたかのように言われているのです。トマスは当然びっくりしました。復活されたイエス様は生きておられるだけではなく、彼がどこで何を考え、何を話したかまですべてご存知でした。イエス様はトマスの言った言葉を一つももらすことなく指でイエス様の釘付けられた手を触るようと言われました(27節)。ここでみなさんに一つ質問します。トマスははたしてイエス様の言われたとおりに主の手にある傷とわきにある傷をさわつたのでしょうか。それとも触れなかつたと思ひましか。聖書にはトマスが実際に主を触つたのかどうかについて具体的な言及はありません。しかし、私の考えではトマスは主を直接触れなかつたと思ひます。なぜなら、すでに目の前に間違いなく以前のイエス様が表れたからです。そして、そのお言葉のためです。すでに主はトマスが何を話したのか、どんな思いをもっているか、どんな状態にいるかをすでにご存知でした。これがまさにトマスの心のかべをくずして、イエス様を信じるようになり、‘私の主、私の神’と告白するようさせたのです。今も復活された主は私の心の思いや考えさえもテレビの画面をご覧になるようにすべてそばで見ておられます。私のすべてのふるまいと言葉がイエス様の前では裸のようにさらけ出されます。メッセージを聞いて見て下さい。全部自分に対する話のような気がしませんか。

使徒ヨハネはトマスの告白をヨハネの福音書全体の結論として用いています。ヨハネの福音書全体の結論が“イエスは私の主、私の神”ですという告白です。その後、イエス様はトマスに何と言われますか。“イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」(29節)。続けて31節に使徒ヨハネの言葉を聞いて見て下さい。“しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。”(31節) ヨハネの福音書の目的は何ですか。イエス様が神様の子であることを証しすることです。しかし、これは目で見て証しするのではなく言葉で証しすることであつて、この言葉を信じるだけでもその人は永遠のいのちを得るという約束です。29節のイエス様の言葉にはトマスをしかっている意味が含まれています。“どうして以前すでに私があなたたちに話した私の言葉を信じなかつたのか。後でもほかの弟子たちからの証言を聞いてもわたしの事を信じなかつたのか”と。

* 弟子たちが証したと主が直接彼に現れて十字架の傷を見せ、触らせたことにはどんな違いがありますか。

イエス様の願われたのはトマスがほかの弟子たちの証しを聞いただけでもイエス様がよみがえられたことを信じることでした。すでにイエス様はトマスを救うために、その御言葉を与えそれによりトマスの魂も癒し、救われるように、彼を生かす力の御言葉になったとはずでしたが、彼はそれを自分で断わってしまっていたわけです。聖書が言っていることは何ですか。主は我々が聞いているこの神様の御言葉、聖書の証を通して我々に永遠のいのちを与えて下さるということです。我々はただ聞いているだけです。今日我々はよみがえられたイエスキリストを見ることも、触れることもできません。しかし、同じように我々にもこの神の証言の御言葉が我々に与えられているのではないのでしょうか。この御言葉が我々に十字架で死なれ、復活されたイエスキリストが真の神様の御子であり、救い主であられることを明確に証しし、我々にある罪からきよくし、我々に救いの望みを与えてくださっています。

<4.見ずに信じるのが幸いである理由>

イエス様は最後にトマスにこう言われました。“イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。”(29節)イエス様がこう言われた理由は何ですか。これからはイエス様を目で見て、イエス様の傷を触ってから信仰を持つとする者はイエス様を真に信じることはできません。なぜなら、イエス様の肉体はこの世のどこにもおらず、最後までだれも拝見することができないからです。ですから、我々は主から遣われた方々の通しての話を信じ、神様の御言葉を信じ、従わなければなりません。愛するみなさん！なぜ見ないで信じるものが幸いですか。主をみないで信じる者は御言葉によって信じることであって、御霊がその人の心の中で悟らせてくださって信じることなのでもっと幸いであるわけです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！人は目に見えるなら、信じますと言います。神が見えないから、信じがたいと言います。愛するみなさん、人間の目というのは、どれほど確かなもの何でしょうか。人間の目が見える世界はどこからどこまで何でしょうか。人の目がその自体だけじゃなく、可視光線(かしこうせん)によって、見ることができるでしょう。つまり、光の助けがなければ、目があっても見えないでしょう。光の助けがなければいくら視力が2.0であっても見えないのではないのでしょうか。私たちの目というのは、光が実は助けてくれない見えないものでしょう。しかも、紫外線(しがいせん)などを省(はぶ)いて見えています。だから、特殊な機械で見ると、肉眼(にくがん)では見えない世界が見えるでしょう。見える世界だけを信じるというのは、無知な話してはならないのでしょうか。光というのにも、色々な光が入っています。放射線も紫外線も入っているが、見えない。では、見えないから信じられないでしゅうか。私たちは信じているでしょう。だから、焼けないように日焼け止めクリームなどを塗ります。また、電波も空中に飛んでいるでしょう。でも見えない。見えなくても信じています。なぜならラジオがついたり、携帯電話が鳴ったりしているからです。空気も見えない。でも、実はあることをみんな信じている。あるから生きている。私たちは見えないものによく支えられて生きている者ではないのでしょうか。見える世界だけを信じるというのは、無知な話してあります。なのにトマスは見てもないからイエス様の復活は信じられないと強調しているのではないのでしょうか。

一度、肉体の目で見たことより、御言葉を耳で聞いて信じる者には御霊がもっと確実な確信を与えて下さるからです。くすしい栄光と喜びもともないます。そして御言葉によって信じるということは悟りによって得られる信仰なのでその悟りでこの世を勝たせます。“あなたがたはわたしを見たから信じたのですか。”見ずに信じる者がもっと幸いです。

<5.イエス様は確かに死からよみがえられました！>

当時歴史資料によりますと、イエス様の復活後の1年間の間、エルサレムだけでイエスキリストを信じうけたユダヤ人は最低125,000人を超えたそうです。なぜなら一番の復活の証拠である空いたお墓は誰でも来て見られるところだったからではありませんか。イエスキリストは弟子たちに、女たちに、そして同時に500人以上の聖徒たちに復活されたご自分の姿を現してくださいました。そしてイエス様が天に昇られるときも500人以上の人々がこの光景を目撃しました。(ルカ24:33,50-51,第一コリント15:6,使徒1:9)。これらの出来事は単なるイエス様を愛していたある個人に起こったまぼろしのような事ではなく、歴史的な事実と違いありません。そうでなければ、これが聖書にこんなに具体的に書かれているわけがないからです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！イエスの弟子たちはほぼ全員がイエスキリストの十字架の贖いの死と復活を伝えながら、殉教されました。今日のトマス(AD52-72)もインドの南部のチェンナイというところまで行ってよみがえられた主を伝えるながら殉教され今もそこにはトマス記念教会が立てられているようです。彼らの後から今にいたるまで、およそ約6千6百万人のクリスチャンたちがキリストのために殉教されたと記録されています。かりにイエスキリストの復活が事実ではないなら、彼らはすべてを失い、何も得られたことなく、この世で一番愚かで、かわいそうな人々になるでしょう。しかし、イエス様の復活が本当に事実ではなければこれらのこともできなかったはずと信じます。しかしイエスの復活を誰かが信じるか、信じないかは関係なく歴史的に確かな事実でした。だったので弟子たちはなんの疑いも、恐れもなく、イエスのためなら死までも喜んで受け入れることができたのです。“イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」(ヨハネの福音書11章25-27節)”この主の御言葉にアーメン！(そう信じます。)と応えられますか。

2016年、復活の主日、イエス様に直接出会うことはできませんが、神の御言葉の証言を通して、そして、信仰の目で今も生きておられ共におられる復活の主を見る事も、信じる事も十分出来るでしょう。イエスキリストの十字架がすべての人々に何の差別もなく、みんなに公開されて、その死がみんなを体表的な贖いの死であったことを教えて下さったように、イエス様の空いたお墓もすべての人々に公開され、だれでもそのイエスキリストの復活を知ることが出来ます。そして、神様はどんな人にもそのイエスキリストを信じる者にはもはや永遠の死はなく、救いの永遠の命を約束して下さいました。今日、この復活の聖日に、どんな人でも、どんなに弱いとしても、絶望な人生を過ごしている人でも、生きておられるイエスキリストと出会えない人はありません。今日改めて復活され愛をもって我々に尋ねてこられたイエスキリストに感謝しましょう。そして、今日からみんな立ち上がってその主の愛を全力を尽くして、喜びの良い知らせを持って伝えるクリスチャンプレイズチャーチの信仰の大家族となりますように主の御名によって祝福します。